

---

# ろくろ首

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
ろくろ首

【Nコード】  
N2555P

【作者名】  
坂田火魯志

【あらすじ】  
吉原に来た二郎吉。そこで朝顔という花魁と夜を共にする。しかし夜中にふと目覚めてみると。元々ろくろ首は遊女がモデルだったとも言われています。

## 第一章

### ろくろ首

吉原は今日も賑わっている。

どの店も花魁達が艶やかな姿を見せ酒と白粉の匂いに満ちている。部屋という部屋から嬌声と琴や三味線の音が聴こえてくる。

夜であるが灯りで照らされそれが闇の中に浮かんでいる。今二郎吉はその吉原の中にいてだ。花魁を物色していたのである。

「吉原に来たからにはな」

彼は飄々とした足取りで人の波の中を歩いている。

「酒と女は仇じゃねえからな」

それを求めて来る場所である。それで敵である筈がなかった。

そこでだ。店の方から彼に声をかけてきたのであった。

「ちよつとそこの旦那」

「おう、何だい？」

「いい娘がいるよ」

「こつ言ってきたのである。

「とてもいい娘がね」

「吉原にはいい娘は幾らでもいるけれどな」

「二郎吉は笑つてその客引きに返した。

「それこそ花魁の数だけな」

「言つねえ。旦那通だね」

「少なくとも吉原は好きさ」

「彼もこのことは認めた。

「ただな」

「ただ。何だい？」

「いい娘は多くてもとびきりのは少ないよな」

客引きに対して笑つてこつ言つのであった。鬚は少し傾き悪ぶつたものである。実は彼は腕利きの鳶職なのである。それで金には困

っていないのだ。

「そうじゃないかい？」

「そのとびきりのがいるんだよ」

「へえ、そんなにいいのかい」

「いいってもものじゃないんだよこれが」

客引きは助平そのものの笑顔になって彼に言ってきた。

「もうこれがね。天女みたいなものでね」

「吉原に天女かい」

「興味を持ったかい？」

「ああ、一度見てみようかな」

こうしてであった。二郎吉は店に入った。そうしてその花魁のところにいくとだ。

畳と襖に障子の部屋にいた花魁は小さな顔に黒髪の姿だった。花魁の帯が前にある赤と金、それに白の絢爛な着物に顔は白く化粧をしている。細く書いた眉に紅の小さな唇が艶かしい。

「はじめまして」

「ああ」

二郎吉は花魁のその挨拶に応えた。

「あんた名前は？」

「朝顔でありんす」

花魁はこう名乗ってきた。

「これがあちきの名でありんすよ」

「そうかい、朝顔かい」

「あい」

「中々いい名前だな」

二郎吉は笑ってその朝顔に述べた。

「それで俺の名は二郎吉だ」

「二郎吉さんですか」

「仕事は鳶職だよ」

「へえ、そうでありんすか」

「ああ。それで今夜はあんたと二人になりたくてな」  
笑顔でその朝顔の傍に座ったうえで話す。

「それで来たんだよ」

「来てくれたでありんすか」

「じゃあ今夜は二人で楽しもうか」

「あい。それじゃあ」

そうしてであった。朝顔は早速杯を差し出してきた。二郎吉もそれを受け取る。

「まずは挨拶に」

「おう、悪いな」

「夜は長いでありんすよ。それじゃあ」

「ああ、まずは飲んでな」

こうしてであった。二人で楽しむ飲みそのうえで楽しい夜を過ごす。そうしてそのうえで。床も共にしたのであった。

二郎吉はこの日かなり飲んだ。それで寝汗もかなりかいてしまった。そのあまりもの暑さに喉が渴いて目を覚ました。するとであった。

「んっ？」

暗い中でだ。横に何かを見た。

「何だこりゃ」

見れば白く細長いものだ。それが床から出て来たのだ。

それを見てであった。彼は目を凝らした。

## 第二章

それで行灯の火を点ける。そして見るとであった。

「あれ、これは？」

床から出ているそれはそのまま畳の上にあつた。それで屏風を乗り越えていた。彼はそれをさらに不思議に思つてた。床から出てその屏風の向こうに行くのであつた。

「な、何だこりゃ!？」

何とだ。その白いものの果てがそこにあつた。その果てとは朝顔の顔であつた。彼女の顔がそこですやすやと寝ていたのである。

「お、おい!」

「あい!」

「おめえ何だよこれは」

彼は驚き焦つた顔でその朝顔に言う。

「何で首がこんなところまで延びてやがるんだ」

「あら、どうしたでありんすか？」

目を覚ました朝顔の返事は実にあつけらかんとしたものであつた。

「あちきに何か」

「だから何かもこうしたもじゃねえよ」

「こう言い返す彼だつた。」

「大体な」

「あい、大体？」

「手前人間なのかよ」

二郎吉はその屏風の裏で腰を抜かしたまま言う。

「若しかして」

「あい、その若しかしてでありんすよ」

「ここでもあつけらかんとした朝顔の返事である。」

「あちきはですね」

「ろくろ首だつてのか」

「そうでありんす。あちきはろくろ首でありんす」

「じゃあ化け物かよ」

二郎吉はたまりかねた声で言った。

「手前、そうだったのかよ」

「あら、ろくろ首は化け物でありんすか？」

ここで一旦朝顔の首が引っ込んだ。そうしてである。彼女は赤襦袢姿で布団から出て来てだ。そのうえで首を少し延ばしながら彼のところに来たのだ。

「それは心外でありんすが」

「化け物でなくて何だってんだ」

彼は何を言うのかという顔で彼女に返した。

「全くな」

「まあまあ落ち着いて欲しいでありんす」

やはりここでもあっけらかんとしている朝顔である。

「それよりも旦那」

「何だよ」

「今喉が渴いてるでありんすね」

「こつ彼に言ってきたのである。」

「そうでありんすね」

「まあな」

それで目が覚めて今に至っているからそのことには素直に頷いた。

「ちよつとな」

「そうでありんすね。それなら」

「それなら？」

「お茶でもどうでありんすか？」

穏やかな声で彼に言ってきた。

「それともお水で」

「酒だ」

だがここで彼が所望したのはこれであった。

「酒をくれ」

「お酒がいいんでありませんか」

「まずは落ち着かせる」

そうするといふのである。

「酒でも飲んでな」

「あい、わかりました」

朝顔も彼の言葉に頷く。そうしてであった。

二郎吉は酒を飲んで気持ちを落ち着かせながらだ。その朝顔と話すのだった。彼女の首はその話をする時も延びていてあちこちを漂っている。

その彼女にだ。彼は言った。

「まさか吉原にいるなんてな」

「それに驚いたでありますか」

「ああ、全くだ」

胡坐をかき杯を手にしながら話す。

### 第三章

「ったくよ、よく延びる首だな」

「ろくろ首でありんすから」

「だから何でここにいるんだよ」

彼はその朝顔の首を見上げて問う。行灯の灯りの中にその首が浮かび上がりとても楽しそうに部屋の中を漂っていた。

「この吉原によ」

「ああ、それはですね」

「どうしてなんだ？」

「ここの旦那に頼んででありんすよ」

「旦那はおめえがろくろ首ってこと知ってるのかい？」

「あい」

ここでまた楽しそうに話す朝顔であった。

「勿論でありんすよ」

「怖いな。化け物でもか」

「けれど人を襲ったり食ったりはしないでありんすよ」

「化け物だつてのにかい」

「化け物でも色々ですよ」

朝顔はこうも話した。

「あちきみになりたいならろくろ首はそんなことしませんよ」

「じゃあ何を食ってるんかい」

「そりゃ人と同じのをでありんすよ」

「だから酒も飲むんかい」

「あい」

その通りだとにこりと笑って二郎吉に答える。

「そういうことでありんす」

「じゃあ何かい？首が伸びるだけかい？」

「そうでありんすよ。首が伸びるだけでありんす」

「そうなのかい。よし、わかった」

「わかつてくれたでありんすか」

「話を聞けばあれだな。ろくろ首は人間と変わらねえな」

「そういうことでありんす。あちきは首以外に何処がおかしいでありんすか？」

首で彼の周りをとぐるに巻きながら問う。

「それ以外の何処が」

「まあおかしくはねえな」

彼もそれは認めた。

「首はおかしいがな」

「けれどそれだけでありんすね」

「そうだな。じゃあいいのか？」

「それでこの旦那もあちきを入れてくれたでありんすよ」

朝顔はまたこの話をしてみせた。

「他にはなーんもおかしなところはないでありんすから」

「そうか。ここの旦那がなあ」

「それで兄さんはどうでありんすか？」

「俺か？」

「あちきが怖いでありんすか？」

「馬鹿言え」

返答はこれであった。

「怖い筈があるか」

「それはないでありんすね」

「ただ首が伸びるだけでどうってことはねえじゃねえか」

落ちて着いて見てみれば本当にそれだけだった。彼も最初は驚いたがそれでもだ。慣れればどうということとは全くないものであった。

「それがどうしたってんだよ」

「それじゃあどう思ってるでありんすか、今は」

「だからどうってことはねえよ」

朝顔にこう返した。

「普通の花魁と同じだな」

「普通の？」

「まあ上玉だな」

ここで花魁としての彼女を話した。

「それもかなりだな」

「言ったでありんすね。上玉でありんすね」

「ああ、上玉だ」

また言ってみせた彼だった。

## 第四章

「気に入ったぜ。これから鼻屑にしてやるよ」

「嬉しいでありんすね。ああ、あちきは化け物ですから」

「何だつてんだい？」

「老いることはありませんよ」

彼の顔の正面に顔を持って来ての言葉だった。

「絶対に」

「人間は年取るのにかい」

「化け物ですから」

それが理由であった。

「もう絶対に」

「そうなのかい」

「ええ。それに人間との間にはやや子もできませんし瘡毒にもなりませんよ」

この時代では梅毒のことをこう呼んだ。顔にも斑点が出てそこから血が出てそれが瘡蓋になるからであろうか。なおこの時代では死に至る病であった。

「どうでありんすか、それは」

「いいじゃねえか。よし、さらに気に入ったぜ」

「いいでありんすな、あちきで」

「いいぜ。じゃあこれからも宜しくな」

「あい、こちらこそ」

こうして二郎吉はこの朝顔を鼻屑にしたのであった。これは江戸時代の吉原での話である。そうして。

今ではだ。吉原は所謂ソープランドの街になっている。今日も今日とて男達が楽しくやっている。そこのある店で評判の娘がいた。

「あの朝顔つてのいいねえ」

「そつだよな」

「雑誌にも出てるしな」

「実際に行ってみると最高だったぜ」

あるソープ嬢のことが話題になっていた。

「美人だしスタイルもいいし技も確かだしな」

「しかも性格も気さくだしな」

「あんないい娘いないぜ」

「全くだ」

こう話されていたのであった。そしてその朝顔自身もだ。

「それは年季が違うからよ」

噂を聞いてけらけらと笑う。首がやたらと動く。

「もうね。ずっとここにいるからねえ」

その彼女が何時から吉原にいるのかは誰も知らない。しかしである。

その首が時々やたらと長く見えるのは気のせいであろうか。それは誰にもわからない。しかし朝顔というソープ嬢は今も吉原にいる。その吉原にである。

「今も今でいいものだよ」

「そうそう」

「そうだよね」

そして仲間内でこんな話をするのであった。

「人間の中で何時までも生きるのも」

「こうして時々首を伸ばせばそれでいいし」

「善き哉善き哉」

朝顔の首は伸びていた。だがそれが伸びる姿は今誰も見てはいない。そして彼女の仲間が若しかするとすぐ傍にいるかも知れない。ただ首を伸ばしていないだけで。もっとも伸びてもそれでどうになるかというところでもないのであるが。

2  
0  
1  
0  
·  
8  
·  
2  
6

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2555p/>

---

ろくろ首

2010年12月1日21時25分発行